

「スワネチアの塩」(Jim Shavante) 1931年 55分 グルジア映画

ミハイル・カラトゾフ(1903-1973)というソ連の映画監督がいます。1957年にカンヌ国際映画祭グランプリを受賞した「鶴は飛んでゆく 日本公開時旧題 戦争と貞操」という作品が、最もよく知られています。彼は、もともとグルジア人で、本名は、ミハイル・カラトゾシヴィリといました。今回、ご紹介する「スワネチアの塩」は、日本では大スクリーンで上映されたことがない作品です。ウェブ上の小さな画では、いくらでも見られますが、カラトゾフについて語られるとき、よく言及される割に、実際見たことがある人は少ないのでは?、と思います。 <http://www.youtube.com/watch?v=IJRALMebwnU&feature=related>

映画史の中では、無声映画期の最終段階を飾るドキュメンタリー映画の傑作の一つとして認知されており、もっと評価されて良い作品です。今回お見せする版は、もう一つの同時代の傑作、「トゥルクシブ」1929年、ヴィクトル・トゥーリン監督と同梱され、VHS版としてアメリカで、発売されているヴァージョンで、英語の字幕が附されています。DVD版は、「初期ソ連映画のランドマーク」4枚組DVDに入っています。上映する作品には、後年作曲された音楽が付けられていますが、もともと欧米の本格的な無声映画の映画館には、大スクリーンの前に、オーケストラボックスが配置され、そこでオーケストラが生演奏されていたので、サイレント映画と言っても、全く無音で映像と観客が対峙していた訳では、ありません。

http://www.flickeralley.com/fat_soviet_01.html

スワネチ地方は、大カフカス山脈の南側の最辺境で、グルジアとアブハジアの境界に位置する地域です。スワン人は、キリスト教徒ですが、チェチェン人とも共通する、帯刀帯銃の文化をもち、銃眼を巡らした石塔に護られた村落共同体に暮らしています。この映画が撮影された、ウシクルという村は、現在では世界遺産に指定されています。カフカス地方は、人類学的に非常に興味深い地域です。実にさまざまな出自の民族が、文化的共通性と、それぞれの独自性を競わせながら、自らの立ち位置を今も探っています。

グルジア映画は、ソ連成立以前からロシア映画とは別の独自の始まりを持っている点で、他の旧ソ連地域の映画とは大きく異なります。既に1910年代に、グルジア映画は成立しています。それと、ロシアの社会主義革命にあたって、グルジアでは、ロシアで政権を奪取したボリシェビキ派ではなく、メンシェビキ派が1918年に政権を担って、ロシアからの独立を目指していました。ボリシェビキ派を率いたヨシフ・スターリン本人はグルジア人でしたが、1921年に、武力制圧によってグルジアの独立を潰しました。カフカスの歴史において、大国主義のエゴの犠牲になったのは、何もチェチェンだけでは無かったです。

「スワネチアの塩」は、辺境の地に人々の生活維持に不可欠な、塩をもたらすための道路建設、「トゥルクシブ」は、中央アジア(トルキスタン)とシベリアを結び、原料の搬出と製品の搬入をスムーズに行うという鉄道建設のプロパガンダ映画です。これらの作品は、ソ連の社会主義建設における第一次5か年計画の理想を高らかに歌い上げています。そこでは、逞しい労働者の姿が描かれ、労働者階級が賛美されています。しかし、史実はちょっと違います。ほとんどのソ連の大規模建設には、例外なく、おびただしい数の囚人たちの奴隷労働が動員されています。日本の戦争捕虜の酷使もその一環でした。囚人たちの中には、反社会的な犯罪とは全く無縁の、抑圧された市民がたくさん含まれていました。ソ連における人権侵害は、スターリン主義の確立から始まった訳ではなく、ソビエト国家の成立当初から始まっていたことにも、注意を払う必要があります。

そういう状況の中で「スワネチアの塩」や「トゥルクシブ」が製作されたこと、製作者たちの、その後の運命が平坦ではなかったこと、カラトゾフやトゥーリンは、映画界に身を置くことこそ許されましたが、長い間、実際の映画製作には携われず、苦勞しました。トゥーリンは、失意のまま1945年に亡くなり、カラトゾフが制作現場に復帰できたのが50年代半ばであったことは、記憶にとどめていただければと思います。ソ連映画には、独特の深みを持った、優れた作品が少なくありません。それは、作り手たちが、さまざまな制約を噛みしめながら、思考を巡らせつつ、映画を作っていたことの結果なのでしょう。